生徒数減少に伴う中学校小規模化による課題及び改善の方向性

第2回 資料1

■ 各学校の状況（学級数は特別支援学級を除く） 【令和４年度】

生徒数・学級数		生徒数				学級数			
		１年	２年	３年	全校	１年	２年	３年	全校
全学年１学級	武川中	20	15	20	55	1	1	1	3
	白州中	23	14	24	61	1	1	1	3
	明野中	23	28	30	81	1	1	1	3
	泉中	40	32	32	104	1	1	1	3
		１年	２年	３年	全校	１年	２年	３年	全校
一部２学級	須玉中	41	33	43	117	1	1	2	4
		１年	２年	３年	全校	１年	２年	３年	全校
全学年２学級	小淵沢中	46	59	49	154	2	2	2	6
	長坂中	55	58	55	168	2	2	2	6
		１年	２年	３年	全校	１年	２年	３年	全校
一部３学級	高根中	66	78	71	215	2	3	3	8
	甲陵中	40	40	40	120				
	全中学校	354	357	364	1075				

教職員 【校長、教頭、**教科教員**、養護教諭、事務職員】
教科教員の人数は、学校の学級数によって決まる。
３学級：６人 ４学級：７人 ５学級：８人 ６学級：９人 ７学級：11 人 ８学級：13 人

教科担当教員の配置例

教科	国	社	数	理	音	美	保	技	家	英	計
人数	1	1	1	1	※	※	1	※	※	1	6

教科	国	社	数	理	音	美	保	技	家	英	計
人数	1	1	1	1	1	※	1	※	※	1	7

教科	国	社	数	理	音	美	保	技	家	英	計
人数	1	1	1	1	1	1	1	1	※	1	9

※現在、小規模校には、上記の音・美・技・家には時間講師が配置される場合もある。

教科	国	社	数	理	音	美	保	技	家	英	計
人数	2	1	2	1	1	1	2	1	1	2	13

部活動
学校規模によって開設数が異なる。

部活動設置数

常設部 ４～６

常設部 ６

常設部 ６～９

常設部 ９

■ 今後、想定される各学校の状況 【令和１６年度】

生徒数・学級数		生徒数				学級数			
		１年	２年	３年	全校	１年	２年	３年	全校
全学年１学級	武川中	17	16	23	56	1	1	1	3
	白州中	18	12	14	44	1	1	1	3
	明野中	16	17	20	53	1	1	1	3
	泉中	28	23	29	80	1	1	1	3
	須玉中	28	28	32	88	1	1	1	3
		１年	２年	３年	全校	１年	２年	３年	全校
一部２学級	小淵沢中（ＡＡ）	17 (20)	21 (20)	25 (20)	63 (60)	1	2	2	5
	長坂中	38	48	53	139	1	2	2	5
	高根中	37	43	32	112	1	2	1	4
	全中学校（ＡＡ）		199 (20)	208 (20)	228 (20)	635 (60)			

※ AA：アメージング・アカデミー（　）は外数

現在の中学校の 【生徒数・学級数の状況】

- 現在の中学校は、合併前の８か町村を学区とする８校に、北杜市を学区とする甲陵中を加え、計９校。
- 高根地区以外の７地区は、小学校と同一学区で、基本的に小学校の児童がそのまま中学校に進学する。
- 以前は、すべての学校で複数学級であったが、現在は３学年すべてで単級である学校が４校である。
- 今後は、３学年すべてが単級である学校が増え、他の学校でも単級の学年が出てくることが想定される。

現在の中学校の 【教職員の状況】

- 教職員の配置数は、学校の学級数によって定められている。（上記の表は、特別支援学級を除いている。）
- 中学校の教員は、各教科の免許を所持し、その免許の種類によって配置される。
- 中学校の教科は９教科、１０科目。（国・社・数・理・音・美・保・技・家・英）
- 全校３学級の教科教員数は基本６名。教科によって無免許、もしくは非常勤時間講師の配置となる。

現在の中学校の 【部活動の状況】

- 中学校の部活動は、教育課程の一環として行われているが、教育課程ではない。
- 部活動は、生徒の自主的な活動であるが、安全管理等の面から教員が顧問としてその指導を行っている。
- 基本的に一つの部活動に２人の顧問を配置し、安全管理及び負担軽減となるようにしている。
- 部活動の開設は、基本的に生徒の希望によることとなるが、教職員の数やその専門性等にも左右される。
- 種目によっては、チーム編成の関係で成立しない部活動があり、他校との合同部活動を探る場合もある。
- 生徒数、教職員の数によって、部活動の種目は減少し、学区外の学校を希望し通学する生徒もいる。

北杜市の中学校における【主な現状と課題】

※適正規模審議会、中学校ヒアリング等での意見からまとめたもの

○甲陵中を除く８校の生徒数は 50～210 人、平均すると 120 人。半数の学校で学年単級でありすべての学校が小規模校である。また、高根地区以外は、小学校からそのまま中学校に進学している。

【参考：学校教育法施行規則 第 79 条 ・中学校の学級数は、12 学級以上 18 学級以下を標準とする。】

北杜市の中学校が小規模校であることによる「よさ」としては、主に
- 小学校の人間関係を中学校に継続し深められるとともに、生徒一人一人の存在が大きく、活躍できる機会が多い。
- 少人数学級が少人数教育につながり個に応じた学習指導が行えるとともに、教員と生徒の距離が近く親密な関係が築ける。
- 小学校区と同一地区では家庭や地域と連携した教育活動が継続しやすい。

などが挙げられる。

一方、「課題」としては、主に次の内容が挙げられる。
- 学年生徒数が少なく、保育園・小学校からの人間関係が中学校卒業まで続き、固定化されリセットできない。
- 生徒数が少数であり、学び合いなどの協働的な学び、多様な学びが制限される。
- 教員の数が少なく教科担当が０～１名であることから、教科指導の深まりの機会が少なく、また生徒が様々な教師と関わる機会が少ない。
- 学年が単級であることから学年・学校行事、生徒会活動等における学級同士の高めあいの機会が少ない。
- 部活動の種目や内容が制限されるとともに、少人数であることで活気のある活動につながりにくい。 など

生徒数が減少し、学校規模が縮小している状況の中で、生徒の学習環境をどう整え、保障していくか。

■「北杜市立小中学校適正規模等審議会」において、上記の課題を改善していく方向性として示されれた提言が次の３案である。

垂直統合（小学校と中学校の統合）

◆垂直統合のねらい

○同一地域のそれぞれの小学校と中学校を統合する。
- ８地区ごと、もしくは複数地区の【小中一貫型小学校・中学校】をつくる。
- 小学校と中学校のつながりを強くし、小中学校としての学校の規模を大きくする。
- 施設の形態には【一体型、隣接型、分離型】がある。（分離型では、現状とあまり変わらない。）
- 小中学校の教職員が、９年間の教育課程を編成し、系統的な教育を目指した教育を行う。
- ＩＣＴを活用し、他の学校と連携した教育を行う。

◆垂直統合による教育の主なねらい
- 小学校での**人間関係をそのままに中学校で深めていく**。
- **小学生と中学生の交流を活かした教育**を推進する。（児童と生徒のつながりの中で、人間関係の豊かさを醸成する）
- **小規模校のよさ**を残しながら、小中統合により一定の規模化を図る。
- 中学校の教員数は現状のままであるが、**小中学校の教職員の乗り入れ**により、指導を充実する。
- 小学校と中学校の**指導上の壁をなくす**。（中１ギャップ）

など

水平統合（複数の中学校の統合）

◆水平統合のねらい

○現在の８校を１～２校に統合する。
- 学年の学級数が３～４学級となることを目指す。
- 教科教員が９教科すべてに配置される。
- ５教科（国社数理英）の教員が複数配置される。
- 部活動の設置種目が増え、生徒の希望に添える。

◆水平統合による教育の主なねらい
- 複数の小学校から集まることにより、さらに**人間関係を広げ、社会性を高める**とともに、互いが刺激し合い切磋琢磨する関係を築く。
- 生徒数・教職員数の増加による一定規模の集団を構成することにより、**生徒の多様な興味や関心に応じた教育**を推進する。
- 学年が複数学級で構成されることにより、**学年・学校行事や生徒会活動が高めあい広がりのある活発なもの**になる。
- これまでの８地区ごとの学区が、北杜市学区、もしくは複数地区の学区になることにより、**北杜市全体を地域として捉えた教育**を進める。
- 教科担当が複数配置されることにより、**教員の教科指導力の向上**を図る。

など

垂直と水平の組合せ統合

◆組合せ統合のねらい

○各学校、地区の状況に応じ、複数の中学校を統合する。もしくは、地区単位で小中一貫型小学校・中学校をつくる。

□水平統合の場合
- 垂直統合以外の学校でを１～２校に統合する。
- 学年の学級数が３～４学級となることを目指す。
- 教科教員が９教科すべてに配置される。
- ５教科（国社数理英）の教員が複数配置される。
- 部活動の設置種目が増え、生徒の希望に添える。 など

□垂直統合の場合
- 地区単位で小学校と中学校を統合する。
- 学年の生徒数は少数のままであるが、小学校と中学校のつながりを強くし、小中学校としての学校の規模を大きくする。
- 施設の形態には【一体型、隣接型、分離型】がある。（分離型では、現状とあまり変わらない。）
- 小中学校の教職員が、９年間の教育課程を編成し、系統的な教育を目指した教育を行う。
- ＩＣＴを活用し、他の学校と連携した教育を行う。 など

３つの提言におけるそれぞれのメリット・デメリット等

● メリット ／ ▲ デメリット ／ ■ 改善方法

※適正規模審議会、中学校ヒアリング等での意見からまとめたもの

	垂直統合 （小中一貫型小学校・中学校）	水平統合 （複数の中学校の統合）	組合せ （小中一貫と中学校統合）
生徒の人間関係の形成に関わる環境	●保育園・小学校の人間関係を継続し、さらに深い関係を築くことができる。 ●中学校に進学する際に、人間関係のトラブルがや抵抗が少ない。（中１ギャップの改善） ●生徒個々の実態を全教職員で共有した上で生徒指導が行える。 ●中学生が小学生の面倒を見るなどの関係が生まれる。 ▲中学校への変化がなく、期待が薄くなってしまう。 ▲人間関係が広がらず固定化する。 ▲小学校までの人間関係がリセットできない。 ▲少ない生徒・教職員の中で相性が合わない場合は、居場所がなくなってしまう。 ▲転入生がなじめにくい場合がある。 ▲小学校高学年のリーダーシップが育ちにくい。	●複数の学校から集まるので、人間関係が広がる。（新しい友達・趣味の合う友達ができる、自分を変えるチャンスができる、他の地域の友達と日常的に交流できるなど） ●小学校までの人間関係がリセットできる。 ●社会性を高め、切磋琢磨する関係を築く機会ができる。 ●クラス替えにより、人間関係の固定化を防ぐことができる。 ●多様な個性との出会いが期待できる。 ●全県一区である高校に進学する際にストレスが少なくなる。 ▲複数の学校から集まり、人間関係を新たに築く必要がある。 ▲大きな集団に慣れる必要がある。（新しい友達ができるか心配、人間関係のトラブルが増えるかもしれない、大勢の中でストレスが生じるなど）	●▲垂直統合、水平統合によりそれぞれのメリット・デメリットを持つことになる。 ▲水平統合は、ある程度の規模でないとそのメリットは限られたものになってしまう。
生徒の学習集団に関わる環境	●少人数を活かした個に応じた指導が受けやすい。 ●気心の知れた中で、学習内容が深められる。 ●生徒個々の発言や表現する機会が多く持てる。 ▲序列化がはっきりした中でマンネリ化が起きやすい。 ▲人間関係が固定化した中で、学習の深まりが得にくい。 ▲能力の高い生徒を中心に授業が展開してしまう。 ■ＩＣＴを活用し、近隣の学校の生徒との交流を通して、学習を広げ、深める機会を設定する。	●多様な考え方の中で、学び合い学習ができる。 ●互いに刺激し合い、切磋琢磨する中で学習ができる。 ●総合的な学習などでは、学級を超えた学年集団としての広がりや深まりがある学習活動が行える。 ●複数の学級による学年自治活動が展開できる。 ●中学校という新たな段階への不安を持ちつつも、期待をもって自分を高めていこうとする意欲を活かす機会が設定できる。 ▲個人の考えが集団の中に埋没してしまうことがある。 ▲競争が激しくなり、ストレスが生まれる。 ■少人数教育やティームティーチングを推進する	
教員の教科指導生徒指導に関わる環境	●９年間を通じた教育課程を編成し、小学校の教員と連携した教育を推進することができる。 ●少人数を活かした生徒の実態に応じた指導がしやすい。 ●小中学校の教員の教科担当の乗り入れを行い、小学校の教科担任制を推進できる。 ●小学校と中学校の合同での研修会を通して、幅の広い研修を行うことができる。 ●学校数を維持することにより教員数の最大化を保ち、学校間の連携により教育の質の向上を図る。 ▲教科担当教員が１人であることにから、その教員個人の力量が学校全体の教科指導力を左右してしまう。 ▲小規模校であるため、校務分掌の負担は軽減されない。 ■ＩＣＴを活用し、近隣の学校の教員との交流を通して、教科指導力を磨き合う機会を設定する。	●教科担当教員が複数であることにより、教科ごとの組織的な指導や研究実践が行える。 ●複数の教科担当教員の中で教員が学び合う機会が持て、研修が深められる。 ●全教科の教員の配置により、授業以外の場面でも日常的に生徒への教科指導を行うことができる。 ●教員集団の多様性、組織化により、生徒の個性に応じた指導や組織的に生徒指導が行える体制ができる。 ●教員の数が増えることにより、校務分掌の負担が軽減される。 ▲生徒個々の実態に応じた指導がしにくい。 ■少人数教育やティームティーチングを推進する。	
学校行事・生徒会活動等に関わる環境	●少人数であることにより、一人一人が活躍できる場面が多い。 ●小学校の行事と連携した活動が工夫できる。 ●小学生と関わる中で、より幅の広い活動が展開できる。 ▲小さい集団の中での活動であり、共同作業による発展性に限界がある。 ■地域の方との交流、近隣の学校との交流、姉妹校との交流等を通して、広がりや深まりとともに発展性を持たせる。	●多人数の中で、生徒個々の個性を活かした活動を行うことができる。 ●複数の学級で刺激し合い、深め合い高めあう中で文化活動や体育活動が実施でき、活動の幅が広がる。 ●生徒の自主的な活動が活気ある活動として展開される。 ▲集団活動の中で、生徒によっては個性を発揮する場がなかったり、個性を伸ばす機会が得られないことがある。 ▲現在の学校の伝統や文化が失われてしまう。 ■統合中学校において、これまでの伝統文化を引き継ぎながら、新しい文化を創造し、新たな伝統を築いていく機会とする。	
部活動に関わる環境	●これまでと同じ状況の中で継続できる。 ▲学校内に設置できる部活動は限定される。 ■近隣の学校との合同部活動を実施する。 ■部活動の地域移行により、地域単位の部活動を実施する。	●学校規模によるが生徒のニーズに応じた部活動を開設することができる。 ●刺激し合い競争が増し、チームや個人が強くなる。 ▲個々の活躍できる場面が少なくなる。 ■部活動の地域移行により、地域単位の部活動を実施する	
通学に関わる環境	●これまでと同じ学区の中で通学できる。	▲学区が広くなることにより、通学距離及び時間が長くなる。 ▲保護者の送迎などの負担が増える。 ■地域によってスクールバスを運行し、長距離通学の負担を軽減し、安全安心な通学につなげる。	
学校施設・予算等に関わる環境	▲施設分離型の一貫教育では、これまでと基本的に変わらず現状維持となる。 ▲施設一体型の場合、小学生と共有できる施設に限度があること、共有する場合にはお互いに制限されてしまうことがある。	●学校統合により、限られた予算や人材が集中でき、生徒の実態や状況に応じた柔軟性のある対応、組織的な対応ができる。	
地域との関わり	●これまでの学区を地域として、生徒は関わりが継続できる。 ●市内８地区を学区として、これまでの地域との関わりの中で学校運営が継続できる。 ●小中同一の学校運営協議会において、活動が実施できる。 ▲小学校と同一の学区の中で、地域の広がりや視点の広がりが持ちにくい。 ■小学校の学区のままでも、北杜市という視点で地域を考え、広がりや発展性を持たせる。	●学区が広がり、生徒は小学校のときより広い視点で地域を意識し、考え、活動の幅が広がる。 ●小学校の地域の上に、北杜市全体を我が町という意識を醸成し、市全体を地域ととらえた教育を推進する。 ●北杜市の中学生を北杜市の地域住民が支援していく体制づくりへと意識の変革を図る。 ▲これまでの地域から中学生の声が聞こえなくなってしまう。 ■学区が広がっても、それぞれの地域の方との交流の機会は継続し、より多彩なものとなるよう発展させる。	